

北区支部現地研修会報告書

1. 開催日時

2024年3月18日（月）10時～15時30分

2. 参加数

22社26名

3. 趣旨

大阪市生野区の 코리아タウンを中心とした地域で、フィールドワークと講座聴講により、 코리아タウンの歴史と現在を差別と人権、多民族共生の視点で学ぶことを目的に実施。

4. 講師

多民族共生人権教育センター 事務局長 文 公輝（ムンゴンフイ）さん

5. 行程・内容

(1) 鶴橋駅周辺フィールドワーク

戦時中に空襲による火災が鶴橋駅に延焼するのを防ぐための防空空地帯が周辺に設けられ、戦後そこで始まった闇市が現在の鶴橋商店街の原型とされる。

2013年4月、JR鶴橋駅前の大通りで在日コリアンに対する大規模なヘイトスピーチとデモが行われ、聞くに堪えない侮蔑的な言葉が投げつけられた。

しかし、ヘイトスピーチ解消法も無かった当時はそれに抗議をする方々が警察に排除される有り様だったと聞き、法が無いと人権を守れない、守られない情けなさを痛感させられた。



(2) 多民族共生人権センターにて講座聴講

スライドとレジュメをもとに「大阪 코리아タウンから考える多民族共生」について学んだ。

戦前は在日コリアンの方々は統制機関である「協和会」への入会を強いられ、警察の監視下におかれたり、日本人より安い賃金（6～7割）で労働に従事させられたと教わった。

生野区に 코리아タウンができた理由として、大阪砲兵工廠が近く、関連町工場の労働者として居住したことや、この地域の長屋は平野川の氾濫エリアで人が無く、入居差別が強かった当時でも借りることが容易に出来た等がある。

差別も受けていたが、戦後の闇市の中で共存共栄が図られ「ホルモン」等の食文化も受け入れられたことが、鶴橋名物の焼肉店街へと発展していったことや、ヘイトスピーチの被害に対して大阪市へ規制する要望を提出する時も連合振興町会や商店会、社会福祉協議会、PTAなどが協



力してくれたことは「仲間」と認められていたと感じたとのこと。

ヘイトスピーチはその場の不快感だけではなく、特に差別が強かった時代を生きた老人ホームのお年寄りはずらい記憶が蘇るフラッシュバックの症状も出たそうで、心の傷は容易に癒えないことを感じさせられた。また、中学の女子生徒もヘイトスピーチに加わっていたことが衝撃的で、周囲の大人の影響も大きいのではと感じ、教育の重要性を再認識した。

(3) 生野コリアタウンフィールドワーク

1930年代のはじめ頃までは御幸町通商店街として、大半が日本人の経営する商店で、横道の細い路地で暮らす在日コリアンの人々が軒先や路上で食材や衣服を売りはじめ、猪飼野朝鮮市場と呼ばれた。戦後は疎開による空き店舗が商店街に目立ったところに市場の人々が店を移し、商店街は朝鮮市場と呼ばれるようになったが、1960年代以降の物流網の発達で朝鮮半島の物産が各地で手に入るようになると客足は遠のき、鶴橋駅周辺に店舗を移す人もできた。

1993年、商店街の愛称を「生野コリアタウン」とし、朝鮮文化を楽しめる商店街として多くの買い物客を呼びこむことに成功し、日本人と在日コリアンとが共生する商店街としても情報発信を行っており人権や多文化共生を学ぶための現地学習の場にもなっているとのこと。

当日も商店街は韓国グッズやフーズを求める若者があふれ、明るいレジャースポットと言ったところで、国家間の歴史問題を意識している様子は無いように感じた。

しかし彼らが「どうしてコリアタウンがここにあるのか」ということを学ぶと、様々な気付きが生まれ、さらに魅力的な商店街に映るのではと思う。



以上



つるのはし跡にて参加者全員で記念写真